



四 国

岸 啓 子

山に隔てられた平地に讃岐・阿波・伊予・土佐と4様の文化を育てた四国の地理は、今も県の個性を守るとともに音楽団体の地域間交流のハードルを上げている。加えて最大都市でも約50万人という規模の問題が、高齢化と絡んで団員や聴衆の世代交代に伴う縮小という試練を音楽文化に課している。しかし逆境の中で輝き続ける音楽団体も勿論多い。

四国唯一のプロオーケストラである瀬戸フィルハーモニーは前年の活躍によって存在感を高め、定期演奏会を成功させた(第25回指揮:松尾葉子 v.l.佐藤まどか)。特に第26回定期ではロシアから指揮者W.ワリトフとピアニストV.コーガンを招き、ショスタコーヴィチの交響曲第5番を含む初の“オール・ロシア”プログラムで新境地を拓いた。同フィルメンバーによる小編成アンサンブルは変幻自在・神出鬼没で、「深まる秋に響きあうコンサート」、一連のハロウィーン・ティータイムコンサート、三越ロビーコンサート等においてサクソホン奏者白井奈緒美ほか多くの地元音楽家と共演し、アウトリーチやデリバリー活動も怠りなく音楽の浸透に奮闘している。高松交響楽団(第114回指揮:山下一史 ピアノ:A.シチコ:第3回高松国際ピアノコンクール2位)は、「至福のリリシズム」の主題のもとラフマニノフのピアノ協奏曲第2番とシューマンの交響曲「春」を好演し、徳島交響楽団(指揮:道端大輝)はチャイコフスキー交響曲第6番「悲愴」を演奏した。地元の支持を集める愛媛交響楽団はサマーコンサート(指揮:大浦智弘 オーボエ:加瀬孝宏)ではバロック・コンチェルトとお話で会を楽しく盛り上げ、第43回定期(指揮:森口慎司 チェロ:N.ローゼン)ではシューマンのチェロ協奏曲等をじっくりと聴かせた。伝統ある高知交響楽団はベートーヴェン交響曲を連続演奏中であり(第154回第6番・155回第7番 指揮:高橋敏仁)、中村交響楽団(第83回定期指揮:柳川雅史 オーボエ:松谷拓郎)は、モーツァルトのオーボエ協奏曲K314ほかのプログラムで四万十国際音楽祭を飾った。

前年からの四国二期会30周年記念公演最後となった香川支部「オペラ・ガラ・コンサート」は、県音楽界の功労者らをゲストに招いて会の歴史を回想した。高知と徳島支部は山田耕伴作品を中心に、愛媛支部はオペラアリアを演出付きで公演を行った。

オペラは、四国二期会が『こうもり』(指揮:牧村邦彦, 演出:井原広樹, アイゼンシュタイン:松本敏雄/若井健司 ロザリンデ:林里美/渡辺理香 瀬戸フィル)、オペラ徳島は『椿姫』(指揮:奥村哲也, 演出:松本憲治, ヴィオレッタ:乗松恵美, アルフレード:藤田卓也, オペラ徳島orch.)、オペラえひめは『カルメン』(指揮:加藤完二, 演出:井原広樹, カルメン:田中友輝子)を上演した。落語とオペラの融合を掲げて独自路線をゆく高松市民オペラちえちりあ(『愛しのマリー』)も健在である。宇和島市では伊達400年祭に因み政宗・秀宗父子を描いた管弦劇『天の赦すところ』が初演された。

今年印象に残ったのは、ホール外のコンサート・イベントの圧倒的増加である。国の重要文化財にして観光資源である萬翠

荘(松山市)では過去最多の音楽会が開催され、香川五色台ハーブ園でのサヌカイト石楽器による連続演奏会(多田羅空音)、三豊市のワンコインコンサート、朗読とピアノによるおはなしコンサート(高松市)、街クラシックin丸亀(高松市丸亀町商店街)、香川総合リハビリセンターでの連続コンサート等枚挙に暇がない。香川県立ミュージアム、あかがねミュージアム(新居浜市)、愛媛県立美術館、高知県立美術館、朝倉ふるさと美術古墳館(愛媛県)等コンサートに積極的な美術館も増えている。

最後に「旅縁」(松山市)をはじめ高水準の演奏会を企画・実行する音楽鑑賞団体An die Musik Ehime等の活動にも敬意を表したい。